

研究報告**社会変容と言語問題****—ブルガリアのメディア言語の観点から—****ヨフコバ四位・エレオノラ**

1989年に始まったブルガリアの社会変容は言語にも様々な変化をもたらした。その中、特に変化を遂げたのは、インターネットやソーシャルメディアの普及により大きな影響を受けたメディアの言語である。本稿では、メディア、とりわけ電子版の新聞に焦点を当て、電子版の新聞に見られる言語使用の変化について考察する。本稿で取り上げる言語現象は、外来語と新語の増加および文語に拡大している口語的スタイルの使用である。文語の口語化は、語彙と文法の両面から検証する。

はじめに

1989年に始まった東欧の民主化に伴う社会変動はその地域の言語にも様々な変化をもたらした。本稿はブルガリア語に焦点を当て、1989年以降ブルガリアのメディア言語、とりわけ電子版の新聞に見られる言語使用の変化について考察する。メディアの言語に着目する理由は、メディアが社会の変化に最も速くかつ敏感に反応し、さらにコンピューター介在型コミュニケーション（eメール、ブログなど）やソーシャルメディアの普及により、言語的スタイルが著しく変わったためである。

本稿では、メディアの言語使用の変化を、語彙および文法の両方面から検証し、その特徴および背景にある要因について考慮する。

1. 語彙をめぐる変化

語彙は言語の中で最も影響を受けやすい範疇である。1989年以降のブルガリア語の語彙に関しては多くの変化が見られるようになったが、その変化には二つの傾向がある。一つは外来語と新語の増加である。一つは語彙の口語化である。これらの問題についてはすでに他の研究（*Медиите и езикът им/ни* 1999, *Българският език през XX век* 2001, Благоева 2006, Бояджиев 2008, *Проект* 2013, Йорданова 2013, Даскалова 2015)で多く取り上げられているため、ここでは、電子版の新聞の言語に特化した簡単な考察に留める。

1. 1. 外来語・新語の増加

1989年以降ブルガリアの社会では二つの変化の時期があった。第一期は民主化が始まった1989年から2007年くらいまでである。第二期はEU加盟(2007年)以降である。第一期には民主化に伴い、生活のあらゆる分野において外部の社会や文化から新しい要素が急速に取り入れられ、また新しい要素とともに新概念や外来語も多量に入り込んできた。さらに、この時期に普及したインターネットが外部からの要素の拡大に拍車をかけた。第二期には、EU加盟に伴い、ブルガリアは他のEU加盟国と足並みをそろえるために、グローバル化を促進させた。グローバル化とともに、新たな外来語が多量に借用された。*Речник на новите думи в българския език* (2010)によると、1990年から辞書が出版される2010年までの20年の間に、ブルガリア語には外国語に由来する新語が5000語増えた。これらの新語が使用されている分野は、経済、IT、教育、文化、宗教、スポーツなどと様々である(Благоева 2006)。

外来語と新語はメディアにも急速に広まった。固有のブルガリア語のことばより外来語のほうが「格好良く聞こえる」[註1]という社会的現象が起き、その結果、メディアにも以下のような、ほとんど外来語(下線)から構成される文が増加している。中には、母語話者ですら意味の理解が困難な文(例(2))も数多く存在する。

(1) 16 godišen hakna sārvari na Apple. (Fakti)

16歳の男の子がAppleのサーバーのハッカーだった。

(2) Menižarät na holdinga oferira säzdavaneto na ofšorka za brejdi obligatzii. [註2] (Novini.bg)

ブルガリア語に外来語が増えた主な理由として指摘される(Йорданова 2013)のは、急速なグローバル化に追いつくため、固有のブルガリア語の語彙から新概念に該当する単語を探し求め当てはめるということに時間をかけず、新概念を表すことばの多くが外来語の原音のままでキリル文字化されたということである。

1. 2. 語彙の口語化

外来語・新語の増加とならび、語彙をめぐるさらなる変化は口語化である。口語化現象はメディアの言語にも拡大している。メディア言語の口語化を促進させた主な要因はソーシャルメディアの普及である。ソーシャルメディアによる新しいスタイルのコミュニケーション、いわゆるコンピューターを介したコミュニケーションが人々の生活を支配するようになった。それに伴い、ソーシャルメディアの口語的スタイルが社会に広まり、新聞を含め文語にも及んだ。

メディア言語の口語化の背景には、さらなる要因も指摘されている(Благоева 2013, Иванова 2013)。それは、いわゆる「メディアの民主化」である。1989年以降のメディアは、民主化とともに自由化が進み、メディアが国家の管理下に置かれていた時代に厳しく行われていた検閲が緩和され、それまで

掲載されていなかった話題を掲載しはじめ、民衆に近づこうとした。新聞は、より多くの読者を獲得するために「楽しい話題」（芸能ニュース等）を提供し、その話題には口語的スタイルが取り入れられた。それが、メディアの口語化につながる原因の一つとなった。

メディア言語の口語化につながったさらなる要因とは編集の問題である。インターネットの普及により電子版の新聞が急増し、編集が行き届かなくなったため、以下のような口語的表現（下線のことば）が新聞の文章にも多く現れるようになった。

(3) Linejki hväřčat v žegite v Plovdiv, vikat gi da merjat krävno. (24 chasa)

暑さの中、プロヴディヴ市を救急車が飛び回っている。救急車が呼ばれているのは、血圧を測るためだ。

(4) Novoto BMW Z4 izgležda strahotno. (Vesti)

新しいBMW Z4の外見は超すごい。

(5) Borisov [註 3] uvolni trima zaradi gafa s vinetkite. (Standart)

ボリソフは、道路料金カードのしくじりで3人を解雇した。

2. 文法使用に見られる変化

語彙より文法のほうが安定し、変化を受け難い言語的範疇であるが、近年、ブルガリア語の文法形式の使用にも変化が見られる。特に変化が見られるのは、「不安定な形式」[註 4]である。しかし、多くの注目を浴びている語彙に比べ、一部の研究での言及(Бояджиев 2008, Ницолова 2009, Буров 2015)を除き、文法形式の使用の変化に特化した研究はない。それを踏まえ、本稿では、文法にも焦点を当て、電子版の新聞の文章における文法形式の使用に見られる変化について考察する。本稿の考察の対象となるのは伝聞法の形式(いわゆる-*I*分詞)[註 5]および定冠詞の使用である。

2. 1. 電子版の新聞における伝聞法の形式の使用

客観性はメディアの基本である。メディアの客観性は、ニュースの提示の仕方のみならず、それを支えていることばにも現れる。ことばの客観性に深く関わっている文法的範疇の中、テンスとモダリティが重要である。ブルガリア語は複雑なテンス・モダリティ体系を有している言語である。話者は、発話において、複数あるテンス・モダリティの形式の中から自分の意図や目的に合わせて必要なものを自由に選定し使用できる。一方では、ジャーナリズムの文章に関しては規範があり(Андрейчин 1944: 275)、書き手はその規範に従い書かなくてはならない。たとえば、過去の事柄を客観的に、つまり事実として伝えるためには、例(6)のように、述語のテンスに定過去形(*Aorist*)を用いなくてはならない。

(6) Trămp i Boltăn obviniha Kitaj v namesa v izborite v SAŠ. (24 chasa)

トランプとボルトンは、アメリカの選挙への干渉で中国を訴えた。

しかし、近年の電子版の新聞は、ソーシャルメディアのスタイルに影響され、規範からの逸脱が見られる。そのような規範からの逸脱の一例としては、客観性が高い形式（定過去形 (*Aorist*), 現在形)の代わりに、主観的意味合いが強い伝聞法の形式 (-*I* 分詞) が用いられるということである。このような傾向の背景には、1989 年以降メディアが扱いはじめた内容に関係があると思われる。90 年代には、インターネットの普及に伴い電子版の新聞が激増し、それまで新聞にはなかった種のニュース、すなわち芸能（有名人の）ニュースが掲載されるようになり、新聞が扱う内容は「公」(public) から「私」(private) へと大きく変化した。また、読者の注目を引くために、その種のニュースにはソーシャルメディアのスタイルが取り入れられ、主観的かつ口語的表現が使用されるようになった。-*I* 分詞もその一つである。-*I* 分詞には様々な用法があり、その基本的用法である情報源（「伝聞」や「推量」）の明示とは別に、「驚嘆」、「不信」、「皮肉」を表す働きもある。-*I* 分詞は、主観性が高く、確実性が高い情報や事実には用いられない。また、口語での使用は一般的であるが、文語での使用には制限がある。しかし、ソーシャルメディアと同じ「感情」を狙う近年のメディアでは、低俗的な内容や、人物への批判、過小評価や皮肉を狙った内容には、以下の例(7)-(9)にあるように、-*I* 分詞が多く用いられるようになった。

(7) Lejdi Gaga polučila predloženie za Černoto kanarče [註 6]. (Novini. bg.)

レディガガは、「黒いカナリア」のオファーをもらったんだって [註 7]。

(8) Desi Banova [註 8] bila hostesa, posreštala gosti v krāčma. (Fakti)

デシ・バノヴァはホステスとして働いており、お客さんを飲み屋に招いていたんだって。

(9) D-r Enčev [註 9] broil 14 000 leva za idealnija No. 906090. (Fakti)

エンチェフ先生は、理想のナンバープレートの 906090 に、なんと 1 万 4 千レバも払ったんだって。

近年、言語における -*I* 分詞の用法が全体的に減少傾向にあるが、電子版の新聞には、以下の例(10)にあるように、人物への批判（不祥事や詐欺のニュース）には -*I* 分詞の使用が未だに見られる。

(10) Vetko Arabadžiev ne razbiral v kakvo e obvinen. (Dir.) [註 10]

ヴェトコ・アラバジエフは、何で起訴されているのかが分からないんだって。

2. 2. 電子版の新聞における定冠詞の使用

スラヴ語の中では冠詞を有するのはブルガリア語とマケドニア語だけである。バルカン地域のスラ

ヴ語の冠詞の起源をめぐっては様々な説があるが、バルカン言語圏における言語接触の結果で発展した言語現象であるという説 (Lindstedt 2000, Асенова 2002/1989, Aronson 2007) が有力である。冠詞の起源を論じるのは本稿の目的ではないので、ここでは冠詞の起源という問題にはこれ以上触れない。

2. 2. 1. 冠詞使用の規範

ブルガリア語の冠詞は後置冠詞であり、接尾辞として名詞の語幹に接続する。以下の表 1 にあるように、名詞の性および数によって形は異なる。また、男性名詞のみにおいては、冠詞の主格形 (長形) と非主格形 (短形) の区別があるが、この区別は標準語 (またその基準となっている文語) のみにおいてなされ、口語や方言では厳密な使い分けのルールは存在しない。方言では、長形か短形かのどちらか一方だけの使用または双方の混合使用が許容される (Гаравалова 2014)。口語でも使用パターンはまちまちである。一方、正書法 (cf. Официален правописен речник на българския език 2012) では、文語に関しては、表 1 に示されている冠詞使用の規範の徹底が求められている。

表 1 冠詞のパラダイム (正書法)

	男性	中性	女性	複数
主格 【長形】	-ät/-jat	-to	-ta	-te/-ta
非主格 【短形】	-ă/-ja			

2. 2. 2. 電子版の新聞に見られる冠詞の使用の乱れ

書かれた文章に関しては表 1 の規範の徹底が求められているが、近年、文語においても規範からの乱れが散見される。冠詞の使用の乱れには二つのパターンがある。一つは、主格に非主格形が使われるということ (例 11、12) であり、さらに、逆のパターン、すなわち非主格に主格形が使われるというパターン (例 13、14) もある。前者は、口語では一般的な傾向としてあるが、後者、特に前置詞を伴う名詞句 (間接目的語) の冠詞に長形が用いられること (例 14) は口語でもさほど一般的ではない。

(11) Protestă [註 11] e utre 20.04.2017 v 18:30 na parkinga v koleloto na tramvaja v Knjaževo. (Novini.bg)
デモは、明日 2017 年 4 月 20 日、18 : 30 からクニャジェヴォの電車のロータリーの車庫で行われる。

(12) Pretendiram, че съм pърvijat човек, kojto izčete ot kora do kora zasedanijata na pârvi sâstav na Narodnija Sâd, че съм edinstvenija [註 12], kojto v načaloto na 90-te godini zapisa razgovora si s Ceko Aleksiev – načalnik na služba “Parkove I gradini” na Centralnite Sofijski Grobišta prez 1945 g. (Frontalno)
 私が、国民裁判の第一回公判記録を隅から隅まで読んだ初めての人間であり、また 1945 年にソ

フィア中央墓地長だったツェコ・アレクシエフとの発話記録を 90 年代にとった唯一の証言者であると主張したい。

- (13) 30 juni 1971 g. Vražkata s ekipaža na Sojuz 11 – sǎvetski pilotiran kosmičeski korab, kojto izvežda v Kosmosa pǎrvijat [註 13] ekipaž na pǎrvata v sveta orbitalna stantzija – Saljyut 1 – e prekǎsnata. (Novini.bg)

1971 年 6 月 30 日に、世界初の宇宙ステーション・サリュート 1 へ最初の乗組員を運んだロシアの宇宙船ソイズ 11 の乗組員との連絡が途絶えた。

- (14) Alessia Santi dizajnerkata na Manila Grace ot novo ni iznenada za novijat [註 14] sezon s novata si linija appunti ! (Vesti)

Manila Grace のデザイナーである Alessia Santi が新シーズンに新デザインの appunti でファンを驚かせた。

上記の例にあるような冠詞の口語的用法が文語に増えていることには二つの要因が考えられる。一つは、文語を口語に近づけようとする動きである。さらなる要因として考えられるのは、冠詞の多義性の軽減とパラダイムの統一である。冠詞には、定性の表示（意味的機能）と統語的役割の表示（文法的機能）という二つの異なった機能があるが、これらの機能の形式的区別が存在するのは単数の男性名詞のみである。そのため、男性名詞だけでは活用の負担が大きく、また、冠詞のパラダイムにも非対称性が存在する（cf. 表 1）。電子版の新聞の文章に見られる冠詞の用法の乱れは、誤用と考えられるものもあろうが、多くの場合は、誤用ではなく、むしろこのような冠詞の使用ルールの簡易化やパラダイムの統一を狙った使用ではなかろうかと思われる。

正書法が定めている冠詞の規範のルールをめぐっては、長年にわたり専門家が議論を続けており、そのルールの廃止を求める動きもある。その議論は、メディア言語における冠詞の使用にも関係しているもので、以下、少しばかり触れておきたい。

2. 2. 3. 冠詞使用の規範をめぐる議論

統語的役割による定冠詞の使用ルール（表 1）は人工的に作られたルール[註 15]であるとしばしば指摘され、そのルールの廃止を訴えている研究者は少なくない（Стойков 2002/1963, Андрейчин и др. 1977, Мирчев 1978, Куцаров 2010, Пашов 2012, Виденов 2013）。その根拠には、本来ブルガリア語にはそういったルールが存在しなかったということと、そのルールが定められているのは男性名詞のみであり、冠詞のパラダイムには一貫性がないということである。また、議論の焦点となっているのは、ブルガリア語では主格・非主格の区別の決定的要因は、冠詞の長形と短形の使い分けではなく、語順である（cf. 「現実的区分」, Иванчев 1968）ということである。つまり、文頭に来る名詞（句）

が通常主語として解釈される。そのため、14a)–c)のように規範が破られていても、ブルガリア語母語話者は、14a)–c)の意味を、規範であるとされる14d)の意味と同じように解釈する。

(14a) Läva napadna tigarä. [註 16]

(14b) Lävät napadna tigarät. [註 17]

(14c) Läva napadna tigarät. [註 18]

(14d) Lävät napadna tigarä. [註 19]

雄ライオンが雄トラを襲った。

従って、電子版の新聞に見られる冠詞の長形と短形の使用の乱れは、単なる誤用ではなく、歴史的根拠を背景に持つ言語現象であるといえる。しかし、冠詞の使用の現状は極めて複雑である。規範文法は、正書法に基づいた長形と短形の使い分けのルールを徹底を求めている。学校教育もその規範に乗っ取って行われている。学校で使用されている教科書も規範のルールを明記している。しかし、インターネットの文章を覗けば、そこにはもはや文語の規範はなく、人々は話すように書いている。冠詞の使用をめぐるこの複雑な状況は多くの議論を生み出しているが、解決には至っていない。

おわりに

本稿では、ブルガリアのメディア言語、とりわけ電子版の新聞に見られる言語使用の複数の変化について取り上げた。これらの変化には社会の変化という要因が深く関わっているが、背景にはインターネットやコンピューターを介した新タイプのコミュニケーションスタイルの発展の影響がある。コンピューターを介した新タイプのコミュニケーションスタイルの影響で、文語の口語化が進み、語彙や「不安定な」文法形式の使用には変化が現れている。

註

1. Замбова (2001: 90) が引用する 24chasa 紙 (1998.5.27) に掲載された次の一例が外来語に対する話者の意識を明確に表している：

”Чуждата дума краси езика”: Трябва да е ясно, че да се почиства езикът от чужди думи е една малоумна позиция. Това е позицията на селянина, който не може да свикне с шума на трамвая. От всеки опит да се плеви и дисциплинира езикът смърди на скудоумие и тоталитаризъм. (「外来語は言語を美化する」：言語から外来語を排除しようとする行為は愚かな行為である。言語から外来語を排除しようとする者は、電車の音に慣れることができない田舎者に等しい。言語に対するそういった草むしりのような試みのおかげで、言語からは愚かさや全体主義の匂いが漂ってくる。)

2. この文の意味は明確ではないため、訳が付けられない。

3. ブルガリアの首相。
4. ここでいう「不安定な形式」というのは、文語と口語で使用に違い（乱れ）がある形式のことである。
5. 語末に-Iがつく形式。
6. アニメ映画の役。
7. (7)~(9)の例文に出現する-I分詞は、伝聞ではなく、命題の内容に対する書き手の驚嘆や皮肉といった語用論的な意味を表している。日本語訳には、その意味に「だって」を用いる。
8. ブルガリア元大統領婦人。
9. ブルガリアの著名な整形外科医。
10. (10)の事柄をもし客観的に表現する場合には、次のように、現在形が用いられる。

Vetko Arabadžiev ne razbira v kakvo e obvinen.

しかし、(10)の述語には、-I分詞に加え、分詞の不完了体の形が用いられているため、文全体が皮肉の意味（「分かっているにも関わらず、分からないふりをする」）を帯びている。

11. 規範では、protestāt でなくてはいけない。
12. 規範では、edinstvenijat でなくてはいけない。
13. 規範では、pārvija でなくてはいけない。
14. 規範では、novija でなくてはいけない。
15. このルールは、方言における冠詞の多様な使用パターンを統一させるという目的で 1835 年に Неофит Рилски が自らの文法書において定め記載し、1945 年には、法律で正書法として定められた。
16. 主格にも非主格にも短形が使われている。
17. 主格にも非主格にも長形が使われている。
18. 主格には短形、非主格には長形が使われている。
19. 主格には長形、非主格には短形が使われている。

参考文献

- Aronson, Howard. 2007. *The Balkan Linguistic League. "Orientalism" and Linguistic Typology*. Ann Arbor : Beech Stave Press.
- Lindstedt, Youko. 2000. Linguistic balkanization: contact-induced change by mutual reinforcement. In Gilberts, Dickey, Nerbonne, John, and Schaecken, Joe (eds.). *Language in Contact*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi, pp. 231-246.
- Андрейчин, Любомир. 1944. *Основна Българска Граматика*. София, Наука и изкуство.
- Андрейчин, Любомир, Константин Попов, Стоян Стоянов. 1977. *Граматика на българския език*. София: Наука и изкуство.
- Асенова, Петя. 2002/1989. *Балканско езикознание. Основни проблеми на балканския езиков съюз*. Велико Търново: Фабер.

- Благоева, Диана. 2006. Неологизмите в съвременния български език. *Български език и литература (електронна версия)*, No. 6.
- Бояджиев, Тодор. 2008. Езикова ситуация у нас в исторически и съвременен план и европейската езикова политика. *Български език 2*: 1–12.
- Буров, Стоян. 2015. Тенденции и промени в съвременната българска граматика. *Български език*, LXII, № 3: 7-24.
- Българският език през XX век*. 2001. София: Академично издателство проф. “Марин Дринов“.
- Виденов, Михаил. 2013. Пак за пълния член в българския език, *Наука 1*. http://old.usb-bg.org/Bg/kn1_2013.htm.
- Гаравалова, Илиана. 2014. *Членуването на съществителните имена в българските говори*. София: ИБЕ.
- Даскалова, Николета. 2015. Медиите и езикът на омразата: ключови зони. *Проект “От предрасъдъци към нетърпимост: обхват и превенция на езика на омразата в България“*: 1-18.
- Замбова, Антония. 2001. Определящи особености в езика на българския популярен таблоид от 90-те години на XX век. *Българският език през XX век : 90-94*. София: Академично издателство проф. “Марин Дринов“.
- Иванова, Диана. 2013. Стандарт и субстрат в българския език Между теорията и практиката. *OPERA SLAVICA* 23: 188.
- Иванчев, Светломир. 1968. Проблеми на актуалното членение на изречението. *Славянска филология* 10: 39–53.
- Йорданова, Деница. 2013. Неологизмите с английски произход, появили се в българския език през последното десетилетие на XX–ти век и началото на XXI–ви век. *Научни трудове на Русенския университет т.52, с. 5.2*.
- Кущаров, Константин. 2010. *Следходността в българския език*. Пловдив: Университетско издателство “Паисий Хилендарски”.
- Медиите и езикът им/ни*. 1999. София: ЕТО.
- Мирчев, Кирил. 1978. *Историческа граматика на българския език*. София: Наука и изкуство.
- Ницолова, Руселина. 2009. Социолингвистични промени при предаване на чужда реч в българския печат през последните две десетилетия в съпоставка с полския печат. *Съпоставително езикознание*, 34-2: 5–20.
- Официален правописен речник на българския език. 2012. Българска Академия на Науките, ИБЕ „Проф. Любомир Андрейчин“. София: Просвета.
- Пашов, Петър. 2012 По въпроса за пълния и краткия член в българския език. <https://unustamatubg.wordpress.com/2012/10/07/>.
- Проект Етнопсихолингвистични и социолингвистични аспекти на езика на пресата в България*. 2013. <https://www.bfu.bg/upload/izdania-BSU/proekt-monografia/Glava1.pdf>.
- Речник на новите думи в българския език*. 2010. София: Наука и изкуство.
- Стойков, Стойко. 2002/1963. *Българска диалектология*. София: Академично издателство проф. “Марин Дринов“.

24 chasa <https://www.24chasa.bg/>

Dir <https://dir.bg/>

Fakti <https://fakti.bg/>

Frontalno <http://frontalno.com/>

Novini.bg <https://novini.bg/>

Standart <https://www.standartnews.com/>

Vesti <https://www.vesti.bg/>

ヨフコバ四位・エレオノラ

富山大学教養教育院

【謝辞】本研究は、平成29年度北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」の助成を受けたものです。記して謝意を表します。